



Title	学生支援室の取り組み：大阪大学人間科学部の場合
Author(s)	丸田, 健
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2013, 39, p. 331-346
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/24773">https://doi.org/10.18910/24773</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 学生支援室の取り組み —大阪大学人間科学部の場合—

丸 田 健

### 目 次

1. はじめに
2. 学生支援室の概要説明
3. 学生支援室への来室状況
4. 就職支援
5. インターンシップ支援
6. 卒業生との連携
7. 相談業務
8. その他
9. おわりに



## 学生支援室の取り組み —大阪大学人間科学部の場合—

丸 田 健

### 1. はじめに

昨今わが国において「学生支援」は、大学が注力すべき教育活動の一つの要となっている。〈大学全入時代を迎え、大学生の多様化が進み、また学生を取り巻く社会環境も激変する中、教員を主役とする従来の大学運営は不十分であり、学生の視線から、大学のあり方を考え直さねばならない〉という認識が年々強くなってきたのである。

学生支援の充実への意欲が膨らんでいく様子は、いくつかの道標的な出来事によって確認することができる。①2000年に文部省より、「大学における学生生活の充実方策について(報告)——学生の立場に立った大学づくりを目指して」——作成した委員会座長の名前を取って、「廣中レポート」と呼ばれる——が出された。この報告はまさに、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」への視点の転換が促すものであり(ただし、それは学生への迎合とは異なる、との注釈がついている)、「学生支援」という語は使われていないものの、その後の学生支援の実際の動きにつながる、多様な提言を掲げたものであった。②2005年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」は、2020年頃までの高等教育の全体像を描くものであるが、その中で「学生支援の充実・体系化」が、早急に取り組むべき12の重点施策の一つとして、最後に登場している。③2007年に日本学生支援機構がまとめた「大学における学生相談体制の充実方策について——「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」」では、特に学生相談の観点から、大学に求められている学生支援の課題を集約し、今後の学生支援体制を築こうとするものである。④2007年度、2008年度には、「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」が実施され、優れた学生支援の取り組みには、財政的支援が与えられることになった。⑤学生の人生観・職業観形成を支援することは学生支援の大きな課題であるが、これに関し2011年度から大学設置基準が改正され、大学教育の一環としていわゆる「キャリア教育」を実施することが義務化された。

人間科学研究科／人間科学部の学生支援室は、以上のような潮流の中、2005年9月に設置された「室」である。もちろん「学生主体の大学づくり」は大学運営の様々なレベルで実現しうること・されつつあることであり、学生支援室のみが研究科／学部の学生支援の任務を負っているわけではない。しかし「学生支援室」の名称が表すとおり、この室が研究科／学部の学生支援の、比較的目立つ部分を担っている。すでに数年の試行錯誤を積み、人間科学研究科／人間科学部の学生支援室の活動には、それなりの型も見えてきた。本稿は、学生支援室の活動の経緯や様子を、在学生への支援という観点に絞って、いったん要点的にまとめて報告しておこうと考えるものである。



## 2. 学生支援室の概要説明

学生支援室の最も簡潔な説明文を、引用しておく：

学生支援室では、専任教員が学生の就職・進路支援、インターンシップの実施や、学生の生活上の諸問題(ハラスメント問題を含みます)の相談に応じ問題解決の援助を行います。また、卒業生との連携の促進や入学希望者への広報なども行い、豊かで充実した学生生活を応援します。

入学時のオリエンテーション、人間科学部パンフレット、『学生便覧』、学生支援室ホームページ<sup>1)</sup>等、学生向けの広報の機会においては、常々この文章によって支援室の自己紹介をしている。

学生支援室の構成員だが、室の基本メンバーは現在、室長、副室長、業務補佐の三名、という形態をとっている。室長の教授は二年ごとの輪番制になっているが、副室長は開室以来同一教員(筆者)が務め、交代はない。業務補佐は、研究科で採択されていたGPプロジェクトの特任助教が学生支援室を兼担した年度や、学生の不定期アルバイトを採用した年度もあったが、この二、三年は事務補佐員が常時在室している。したがって学生支援室の開設以来、継続的に関与しているのは筆者のみである。平常は実質的に、私と事務補佐員の二名で、支援室業務に当たっている。開室時間は年度・学期によって変更があるが、基本は平日10:30-17:00としている。基本メンバーに加え、各学科目からの学生支援室委員が、学生支援室を構成している。だが目下のところ、学生支援室委員を含めた構成員全員が会するのは年に数回、日本学生支援機構奨学金の受給者や返還免除者の優先順位を決めるときのみである。

学生支援室の活動内容については、初代室長であった藤田綾子教授(現甲子園大学心理学部学部長)と私とで、その基本をゼロから整えた。藤田教授は前任校が私立大学で、一般に国立大学より充実している学生支援の形を知っておられたので、私大での経験を基に、学生支援室業務をひとつずつ選んでいかれた。それらはいわば器の選択であって、私はそれらの器の中身となるものを手探りで準備し、実際に盛っていった。着任当初、私には学生支援についてはまったくの未経験であったが、学生支援室の運営を曲がりなりにも軌道に乗せることができた。自分自身が人間科学部の出身であり、学部のコネセプトや教育内容、学生のタイプなど、一通り勝手を知っていることが、未経験の分野で仕事をする上で、かなりの機動力を与えてくれたと思う。いずれにせよ、いまの学生支援室の活動はこういったスタートの延長上にある。学生支援室の活動内容は現在——部分的に重なり合うものもあるが——具体的には以下のように分類している：

- ①なんでも相談の窓口
- ②就職・進路支援
- ③インターンシップ支援
- ④入学希望者への対応(オープンキャンパス実施、高校からの大学見学対応)
- ⑤卒業生との連携
- ⑥奨学金に関する事柄

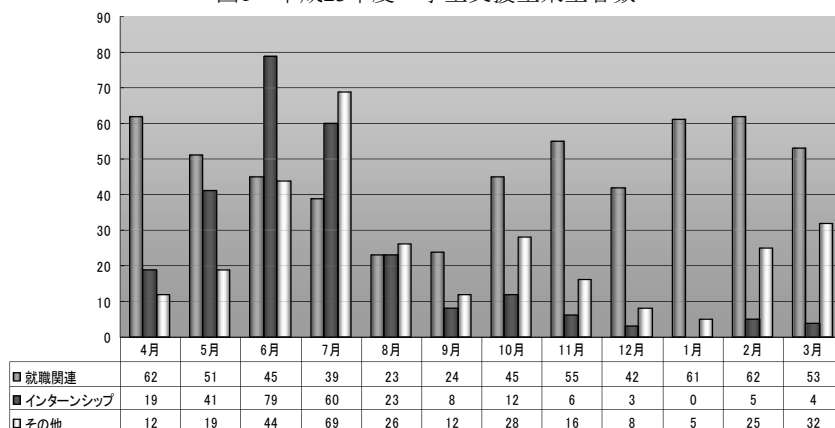
活動は多様な分野に亘っている。これらの広範な活動項目を汲んで、学生支援室の掲げるスローガンとして「入学前から卒業後まで」はどうかという提案もあったが、まずは少人数体制で可能なことを地道に実行していくというスタンスが賢明と思われ、「揺り籠から墓場まで」風の大仰なスローガンは封印してある。

### 3. 学生支援室への来室状況

学生支援室の平常の活動の一つは、様々な理由で学生支援室へ来室する学生に、対応することである。学生もいろいろである。勢いよく入ってきて、用件をはきはき述べる学生もいれば、おとなしく、こちらから話しかけないと口を開いてくれない学生もいる。小さな挙動からして一人一人随分違うことが、支援室にいて随分分かるようになった。

下のグラフ(図1)は、昨年度の学生支援室来室者の延べ人数を図示したものである。このグラフでは、学生支援室に来室する学生を三つのカテゴリー(就職関連、インターンシップ関連、その他)に分けた。普段の支援室利用の傾向を掴んでいただくため、それぞれのカテゴリーの来室について簡単に説明を加えておく。

図1 平成23年度 学生支援室来室者数



まず①インターンシップ関連の来室だが、インターンシップの実施は——その受入先

の種類にかかわらず——大学の夏季休業期間中がほとんどであるから、その準備のために、6月、7月に来室者が増えている。②就職関連の来室については、学生たちは3年生の秋ごろ以降から就職活動について本格的に考え始めるので(新卒者採用のための企業の広報活動は、昨年は2ヶ月後ろ倒しになり、12月1日が解禁日であった)、その時期から利用者が増え始める。そして4年生になって4月、5月でいわゆる内々定がかなり出揃うので、以降は就職活動関連での利用者は減少していく。③その他のカテゴリーには、一括りにはできない色々な来室者が含まれてる。6月、7月に増えているのは、8月のオープンキャンパスを手伝ってくれる学生たちが出入りするからである。学生生活上の相談もこのカテゴリーに含まれている。

人間科学研究科／人間科学部の学生支援室利用者の全体的傾向としては、立地の特殊事情に拠るものも含め、下記三点を挙げることができる。①学部低学年の学生の支援室利用は、非常に稀である(皆無ではない)。人間科学部生は、入学からⅢセメスター(つまり2年生前期セメスター)までは学生生活の拠点が豊中キャンパスに置かれるため、彼らが吹田キャンパスにある人間科学部棟の学生支援室を訪れることができるようになるのは、基本的にⅣセメスター(つまり2年生後期セメスター)以後となるからである。②上のグラフで説明したように、就職関連、インターンシップ関連での利用者が大半を占める。これは実質的に、2年生後半でなく、3年生から学生支援室の利用が本格化する、ということである。③またグラフに内訳は示さなかったが、学部生の来室がほとんどであり、院生の利用は学部生と比べると少ない。

ここまでの概要的説明を踏まえたうえで、以降は特に在学生支援の観点から、学生支援室の個々の活動を紹介していく。

## 4. 就職支援

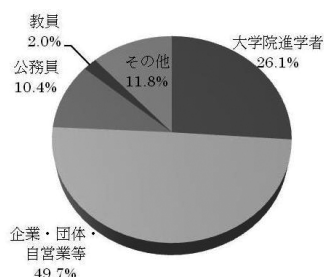
1972年に創設された、日本で最初の人間科学部の初期卒業生は、新参の学部名称が世間から認知されず、就職には非常に苦労したという。私が学部生だった20年前も「人科は就職に不利」という言葉を耳にした。だが創設から40年が経ち、新設学部が濫立するいま、かつての先鋭的な珍しさは失せ、人間科学部は、大方の目には、「ワンオブゼム」の「正統的」学部になっている。大阪大学の人間科学部生は就活時には、初期の卒業生には無縁だったという、いわゆる「銘柄大学の学生」扱いを、普通に受けもしているだろう。

そういった状況の好転はあるものの、学生支援室で就職支援を行うことには意味がある。理由はいくつか挙げられる。まず人間科学部の教育プログラムでは公共的視点、NPO的視点、福祉的視点に馴染む機会が多いのに反し、企業的視点を学ぶ機会<sup>2)</sup>は乏しいため、学生が就職活動時に戸惑う可能性があること。また人間科学部は、文系学部としては唯一、吹田キャンパスに立地しており、経済学部、法学部、文学部等、他の文系学部生の動きを感じる機会が少なく、就職活動のスケジュールに乗り遅れる可能性があること。

それに就職活動の開始以降、選考過程で繰り返し落とされるなどが原因で、精神的に落ち込む学生が実際出てくること。こういったことを踏まえると、やはり就職支援の必要性は否定できない。

人間科学部の卒業生の進路内訳を見ると、グラフ(図2)のようになっている。卒業生の約半数が、民間企業に就職する。日本の新卒の採用プロセスは、独特の慣行の上に成り立っており、多数の企業の採用選考がかなり密なスケジュールで数ヶ月の間にシステマティックに一斉に進んでいく。このような仕組みが現実であるからには、マニュアル的知識は——それにどこまで忠実になるかは別として——一通り持っておいたほうがよい。そういったことを含め、適切な時期から自分で情報収集・判断し、自分で動ける学生は心配ない。しかしなかなか自分から動こうとしない学生もいる。支援室では、主に後者の学生を支援対象として考えている。就職活動にどこから手をつけてよいか分からない、研究室での研究が忙しい、などの理由で、なかなか乗り出さない学生でも、大概、少しのきっかけがありさえすれば、あとは就職について自分で考え、自分で行動できる力を備えている。学生支援室では、そういった「ちょっとの後押し」を目指している。

図2 平成23年度 人間化学部卒業生進路内訳



学生支援室の就職支援業務としては具体的には、①就職関連情報の管理・提供、②就職関連図書の購入・貸出、③就職ガイダンスの実施、を行っている。

#### 4-1 就職関連情報の管理・提供

研究科／学部には、企業や官公庁や就職情報会社などから日々送られてくる、求人や採用試験や説明会に関する様々な情報がある。学生支援室では、そういった送付物をファイリングし、大型ポスターを含め、掲示可能なものは室外掲示板に貼り出している。また学生支援室のウェブサイトにも、新着情報としてアップしている。これらの情報は他所でも入手できるものなので、それ自体はあまり利用価値はないが、学部内——いわば自分たちの領内——にあることで、学生へのそれなりの刺激・注意喚起にはなっているかと思う。また臨床心理士の募集等、対象者が特定できる募集で、利用される可能性が比較的高いものについては、関連する研究室へ個別に情報を提供するようにしている。

#### 4-2 就職関連図書の購入・貸出

学生支援室では、就職関連図書を購入し、その貸出を行っている(貸出期間は二週間)。業界地図、各種業界研究、会社四季報、エントリーシート対策、筆記試験対策、面接対策、マナー本、公務員試験・資格試験概説、公務員試験問題集、「就活」テーマの新書、

などの書籍を取り揃えている。加えて、就職活動関連や仕事関連(『プロフェッショナル仕事の流儀』等)のDVDも揃えている。学生からの購入リクエストは積極的に受付けている。年間百数十件以上の借出しがある。

### 4-3 就職ガイダンス

学生支援室では、毎年就職ガイダンスを計画し、実施している。例えば昨年度のガイダンス日程は下表(表1)のようであった。各回のタイトルを記しておいた。

ガイダンスの対象者は、研究科／学部就職を目指している学部3年生、修士1年生である。

表1 平成23年度 人間科学部就職ガイダンス

①公務員試験制度説明会(4月)
②就活導入ガイダンス(5月)
③大学院生のための就職ガイダンス(6月)
④就活の最重要ポイント 仕事と自分の結び方(6月)
⑤内定者報告会(7月)
⑥会社の見方・調べ方(10月)
⑦キャリア白熱教室(11月)
⑧エントリーシート対策(11月)
⑨公務員試験セミナー(11月)
⑩筆記試験対策(12月)
⑪企業研究(12月)
⑫人間科学部×文学部 グループワーク特別講座(12月)
⑬卒業生がやってくる! 会社説明会(12月)
⑭実践面接講座 面接対策(1月)

①～⑥までが春から夏季休暇前、⑦～⑭までが秋から冬期休暇前、⑮のみが年明けの実施であった。ガイダンスの内容については、前年度末から年度初めに、学生支援室にて大体の計画を立て、各回の講師を就職情報会社や資格試験専門学校に委託しているケースが多い。就職情報会社によるガイダンスは、もともとは支援室を訪ねてきた学生たち(K君、M君)の要望に応じて始めたものである。支援室では他に、情報会社の力を借りないガイダンスもいくつか実施している。それらを紹介しておこう。

例えば⑤の内定者報告会は、人間科学部学生自治体と協同で実施したもので、就職活動を終えた4年生が、3年生に対してアドバイスを与えるという趣旨の企画である(就活を控

えた修士学生の参加もある)。上回生によるガイダンスは、毎年開催しており、その形態は年毎に少しずつ違うが、昨年度は6名の4年生がアドバイザーとして協力してくれた。この報告会では、まず6名の自己紹介があり、次に2名が代表で、自分の就職活動の振り返り発表をした。その後は、会場を相談コーナーに分割し、それぞれのコーナーに待機している4年生を、3年生が巡回して個別に質問をする、という流れであった。この企画では、同じ学部の先輩学生の実験の体験に基づく話を聞くことができ、就職情報会社のマニュアル化したガイダンスからは得られない情報が取得できるばかりか、4年生が自己および将来をどのように捉え、選考過程でどのように失敗し、最終的にはどのような結果・

選択に迫り着いたか、などについて語ってくれる真摯な話は、単なる情報以上の手引きを与えてくれると思う。就活をする学生にはぜひ参加を勧めたいガイダンスである。ただ、一つだけ上の先輩という身近さが裏目に出るのか、ガイダンス対象者の参加が、こちらの期待より少ない。より多くの参加を目指して、効果的アピールの必要がある。

また人間科学部のOBOGの協力を得たガイダンスもある。⑦の「会社の見方・調べ方」では、企業信用調査会社に勤める卒業生(平成18年度卒)に来てもらい、自身の学生生活、自身のキャリア、そして会社を見分けるポイント、について講演をしていただいた。⑭の「卒業生がやって来る！会社説明会」では、三社の参加があり、それぞれの企業から、人間科学部の出身者に来ていただいた(⑫の「企業研究」では、商社一社による業界説明を行ったが、このときも人間科学研究科の修了生が参加した)。それぞれの卒業生に、自身の学生生活、自身のキャリアについて語ってもらい、在学生へのアドバイスも頂戴した。卒業生(つまり「未来の自分」)と相對することで、現役学生たちは、間近に控えた就職活動について、いっそうの現実感をもって構えることができるし、また卒業生だからこそ後輩に与えようと思えるアドバイスもあり、卒業生の協力を得たガイダンスは、今後とも積極的に実施したいと考えている。

あと、特記すべきこととしては、他学部の学生も交えて実施したガイダンスがある(講師は就職情報会社)。⑧「キャリア白熱教室」と、⑮「実践面接講座 面接対策」である。⑧は企業人を呼び、働くことの意味を考える、という趣旨の企画で、グループディスカッションの時間が多く取られていた。参加者は、人間科学部生以外に、外国語学部をはじめとする他の文系学部生も多く、普段顔を合わせない者同士でディスカッションができた。⑮は文学部との協同実施だったので、文学部の学生も多く参加した。ここでも人科生は、普段とは違う雰囲気 of 学生と交わることができた。前述のように人間科学部は広い吹田キャンパスの片隅にポツンと位置する唯一の文系学部で、他の学生との接触の機会が少ない。就職活動が本格化する時期、このような、他学部の学生とも接触・交流する機会は、人間科学部生には刺激になると考える。

図3 就職ガイダンスの様子



## 5. インターンシップ支援

人間科学研究科／人間科学部では、インターンシップを単位化している。授業に登録

して、学外でインターンシップに参加し、その報告書を提出することで、単位が付与される仕組みである(二単位)。ここで特殊事情の説明が要るのだが、制度上、人科のインターンシップ科目には、AとBの二種がある(学部では「インターンシップ実習A」と「インターンシップ実習B」が、また大学院では「インターンシップA」と「インターンシップB」が)。二つの違いはといえば、Bは、学生が自分が所属する研究室の指導教員の指導の下、自分の研究と直結したテーマを掲げ、テーマに関係する組織でインターン実習をするものである(例えば国際協力学

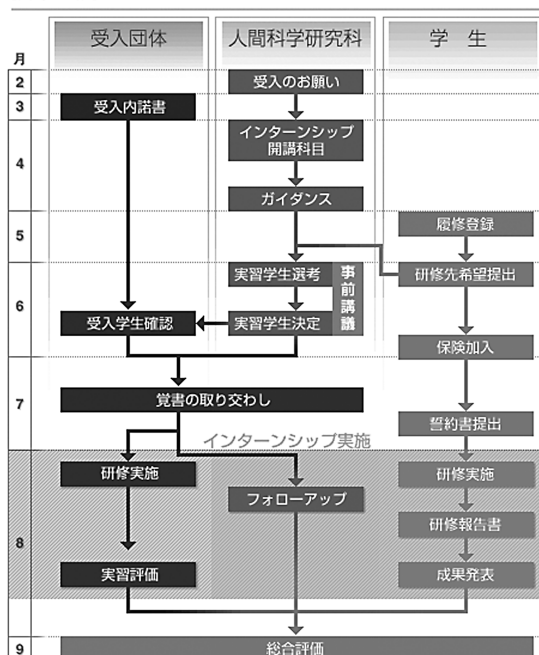
を専攻する学生なら、国際機関での実習が考えられる)。それに対し、学生支援室が担当しているのはAのインターンシップである。Aのインターンシップはかなり自由度が高い。学生は、Bに準ずる形で研究目的でインターンシップをしてもよいし、就職活動の準備としてのインターンシップをしてもよいし、何か有意義な社会経験を求めてインターンシップをしてもよい。ともかく自分で目的をもって主体的にインターンシップに取り組み、自分の体験に自分で意味を与えよう、というのが、Aのインターンシップの趣旨である。以下、Aのインターンシップに限定して、説明をする。

インターンシップ科目へは例年、30名程度の参加者がある。履修対象は3年生以上で、履修者はほとんどが学部3年生だが、修士1年生も1～2割程度混じる。履修登録時のもっと学生数が多いが、全員が実習先を見つけることができるわけではないため、最終的には30名程度に絞られる。

インターンシップ科目の中核は、実習体験そのものであるが、そこにうまく至れるよう、不定期に授業を実施している。夏までに、8回の集まりがある。授業の流れは、おおよそ以下の通りである。第1回から第3回では、まずオリエンテーションを行い、科目の目的、実習までの流れ(図4)、注意事項等の説明をする。そしてインターンシップのイメージをつかめるよう、経験者や受入先担当者を招き、体験発表や受入先紹介をしてもらう。経験者については、実習目的、学部生／院生、受入先の種類、が多様になるよう配

図4 インターンシップ授業の流れ

#### 授業の流れ



慮しつつ、前年度の履修者に依頼している。受入先も、インターンシップの種々のプログラムの統括団体、個々の民間企業・NPO団体と、多様性を確保できるように協力依頼をしている。第4回では、これまでの授業を踏まえ、自分がどのようなインターンシップをしたいかを自覚させ、各自の志望を尋ねる。VPIという簡単な職業興味検査も体験してもらう。第5回～第6回は、キャリアカウンセラーである外部講師を招き、事前研修を行っている。第5回の担当は、人間科学部の卒業生であるが、インターンシップ実習へ向けての動機付けの講習を行っていただいている。第6回は、別の講師に、社会人マナーの講習(挨拶の仕方、職場でのコミュニケーションの作法、メールマナーなどなど)を依頼している。第7回は、事前発表会であり、夏休み直前に開いている。この時期になると、実習先も大方決まっているので、グループに分かれ、実習先や実習目的を発表しあう中で、各自の目的を再自覚させるようにしている。実習を挟んで、夏休み明けの第8回目の集まりは、事後報告会である。各人の体験を自分だけのものにしておくのではなく、それを互いに共有してもらう。そうすることで、自分の体験もより深く理解できるようになる。年度末には、その年度のインターンシップ実習のレポートを一冊の報告書として印刷し<sup>3)</sup>、次期のインターンシップ科目履修者への資料として活用している。

昨年度の実習者の実習先は下記の通りである：

- ①民間企業：SMBC日興証券、大阪ガス、日立ソリューションズ、パソナグループ、タカラトミー、など
- ②非営利団体：国際協力機構(JICA)、暮らしネットワーク北芝、大阪企業家ミュージアム、キッズプラザ大阪、修徳学院、とよなか国際交流協会、など
- ③官公庁：文部科学省、大阪府、豊中市、尼崎市

実習時間は原則80時間であるが、なにぶん受入先があつての実習ゆえ、実習先の事情も配慮する必要があり、それより短い時間の実習となるケースもある。受入先としては、学生支援室で開拓した諸団体もあれば、大学の学生部経由で応募するものもあり、また学生が自分で開拓するところもある。特に民間企業での実習については、学生支援室で紹介できるところは僅かであるため、民間での実習希望者には自主開拓を奨励し、応募の際にはエントリーシートの添削など、必要な助言を行っている。

インターンシップに出かけた後の学生の声は肯定的である。いくつかの例を挙げておくと、「実務に近い業務に当たらせてもらい、就業を目指すにあたり、具体的なイメージが付きやすくなった」「今後の進路選択に大いに役立つと思った。やはり幅広く業界を知ったり、ウワサや偏見に惑わされないためのよいきっかけになったと思う」「非常に貴重で意義ある経験ができました。就活においてだけでなく、学生として、人としておおいに良い影響を受けたと思います」「自分には何か足りていなくて、これからどう生きていくのか(自分の軸、夢、使命感)を考えるきっかけになった」。またインターン



シップによって学部での学びと、将来の職業とのつながりを理解したという声、また大学での研究にインターンシップ経験を還元できそうだという声もあった(「自分の勉強内容が公務員の仕事でどのように活かされるかを知ることができた」「インターンシップで様々な現場を見させていただく中で、卒論のテーマをみつけることができた」)。インターンシップAの実習は目的も行き先も様々で、一つにまとめあげることは難しい。毎年繰り返しているのは、先にも述べたように、「実習参加者一人ひとりが、自分なりの目的をもって実習に出かけ、自分の体験に自ら意味を与えること」である。参加者は実際、これを果たしてくれているようである。

## 6. 卒業生との連携

学生支援室では、卒業生との連携ということも担当している。これは現在、就職支援の一環として行っていることである。大学から社会への移行が、よりスムーズに進むよう、在学生在が卒業生と接触できる機会を作ろうということである。本来は、同窓会の協力が得られればよいのだが、人間科学部の同窓会は、存在はするものの、活動は停止状態である。(個人情報保護法の施行後、卒業生情報の取り扱いを巡って、大学と同窓会の間でのやり取りが混乱し、活動の基本である同窓会名簿が作成できなくなって以来、活動が途絶えていると聞く。学生支援室ではその後、同窓会が把握していない2001年から2007年の卒業生1853名を対象に、卒業生情報の郵便調査する任を得、返信があった386名分の情報を了承の上同窓会に提供し受理されたが、すでに停滞した活動が再開するきっかけにはなれなかった。)そこで学生支援室では、この数年の卒業生から、卒業生リストを作成して、それを管理している。卒業時・修了時に、了承を得られた学生からは、卒業後の所属先・コンタクト先を大学に残してもらうのである。携帯アドレス、メールアドレスの変更で、すでに連絡が取れなくなっている人もいるが、現在は、過去3年の卒業生200名ほどの名がある。

在学生在は、このリストに載っている卒業生にコンタクトをとって、就職活動の際、卒業生から仕事の話などを聞けるようにしている。学生に開示されているのは、最初は卒業生の所属先のみである。学生が、コンタクトを取りたい卒業生を見つけた場合、質問事項を整理して学生支援室にコンタクト依頼をする。その際、自分で調べて分かるような質問はしないように指導する。質問内容を見て、コンタクトが有意義なものになると判断した場合、支援室は卒業生に、対応の打診をする。諾の返事があった場合、在学生在にコンタクトアドレスを知らせて、訪問なりメールなり、実際のコンタクトが始まる。終了後は、在学生在に簡単な報告を提出してもらう。(人気企業勤務の)特定の卒業生に負担に偏らないよう、同一卒業生へのコンタクトは、年間二回までにしている。

このリストを利用して、卒業生とメールでやり取りしたり、実際に会って話を聞いてきた在学生在が、少しずつ出ている。昨年度は9件の接触があった。

## 7. 相談業務

学生支援室は「何でも相談」の窓口となっているので、どんな相談にも窓口として対応している(「教務係はどこですか」などという「相談」もある)。また研究科／学部では昨年、「人間科学研究科・人間科学部ハラスメント相談室」を設置し、ハラスメント相談に対応する体制を強化した<sup>4)</sup>。相談員となっているのは、人間科学部の四つの学系から選ばれた教員、および学生支援室教員である。

相談員としての基本技能を得るために、これまでに学内外の各種研修会に出席した(「全国学生相談研修会」(日本学生相談学会主催)、「近畿地区メンタルヘルス研究協議会」(日本学生支援機構主催)、「国立大学協会近畿地区支部専門分野別研修」、学内の「ハラスメント相談員研修会」など)。

対応が困難な相談の頻度は、さいわい低い。平常は、就職活動の関する相談に乗ることが多い。エントリーシートの添削を依頼されることも度々だが、これも相談業務の一環として対応している。就職活動が不調だという学生が来れば、対応策を一緒に考えることもする。またははっきりと相談を装わずに来室する学生(「本を見にきました」「履歴書をもらいに来ました」)も、内心は心配を抱えていることも多いので、時間が許せば、世話をしたりするようにしている。

平常は就職関連の相談対応が多いものの、時折、深刻な相談も舞い込む。相談に値する問題が、こじれるまで潜伏してしまわないよう、学生が気軽に利用できる「なんでも相談」の窓口として、アピールを保つ必要はあると考える。また豊中キャンパスを拠点に学生生活を送っている1年生、2年生に関しては、入学時および年度初めのオリエンテーションの際、学生支援室の存在について周知するとともに、豊中キャンパスで利用できる様々な相談窓口があることを、説明している<sup>5)</sup>。

## 8. その他

学生支援室の活動を、在学生支援の観点から、紹介してきた。入学希望者への対応(オープンキャンパスや高校からの大学見学、出張授業)については、今回は割愛した。奨学金に関する業務は、主に事務的な業務であるため、それも省く。在学生を対象にした、その他の学生支援室の活動として、学生の自主活動の支援、ということも行っている。現在、大きなものとしては①『人科パンフ』と②卒業文集の作成支援がある。

図5 学生自主活動支援成果物



両方とも、学生自治会からの要望を受けて、支援が始まった(制作費の支援)。前者の『人科パンフ』というのは、新入生が作成する冊子で、7月頃に完成する。上回生の指示の下、新入生が互いの親睦のため、自己紹介的記事を書いたりしている。4年間を共に過ごす人たちのつながり作りを通して、学生生活が豊かなものになればいいと考える。卒業文集は、4年生が12月頃から準備し、卒業式までに完成させている。学生が人科への愛着とともに社会に巣立ってくれば、それは巡り巡って学部資産にもなろう。これらの印刷物の製作過程で時折障害が起きることもあるが<sup>6)</sup>、そういったことも乗り越えて、毎年完成にこぎつけてくれている。

## 9. おわりに

大阪大学では、各部局・各研究科で学生支援に関わる教員・事務職員が情報共有を行う「フロントスタッフミーティング」が、学生部の学生支援組織である学生支援ステーションの統括の下、定期的に行われている。そこに出席して感じることは、大学全体で実施されている学生支援というものが、学生支援室で実感するものに輪をかけて広範である、ということである。カルト問題への対策、身体障害を持つ学生への支援、発達障害を持つ学生への支援、ハラスメント対策、新入生の適応支援、留学生の入口・出口支援、教員だからこそできる支援、事務職員だからこそできる支援、等々。これらの支援の内容は、各部局での特殊事情を反映したものでもあったりする。これだけ多種多様になると、大学での学生支援なるものの展望を得るのも難しくなってくる。だが学生支援室での支援を考えると、大学全体の学生支援の中での位置づけを意識するようにすれば、学生の視点により敏感になることができ、また他部署との日頃の連携も可能になるなど、よりよい支援に繋がるだろう。

人間科学部の学生支援室の活動の今後の課題について言えば、個々の活動について、課題や改善の余地があることは、日々実感している。業務の全体を見渡して言えば、必要とされる学生支援の形が複数領域に及んでいるため、一つ一つの支援の形態において、また一人一人の学生に対し、十分な対応ができていだろうか、という懸念は拭い難い。だが学生支援の充実は時代の要請であり、学生支援室でも、今後とも工夫と努力の継続が必要とされる。できるだけ業務をスリム化、効率化させつつ、同時に支援の質を高めるという方向を、矛盾に陥らずに目指す、というのが、現在の学生支援室の課題であると感じている。

## 注

1) 学生支援室ホームページ：<http://sso.hus.osaka-u.ac.jp>

2) この指摘は、私にも跳ね返るのだが。

- 3) 大阪大学大学院人間科学研究科／人間科学部 学生支援室『インターンシップ報告集』(平成18～23年度)。
- 4) 「人間科学研究科・人間科学部ハラスメント相談室に関する規程」を含む相談室概要：  
<http://www.hus.osaka-u.ac.jp/info/harassment.html>
- 5) 人間科学部では、学生が豊中キャンパスにいる間は、クラス担任制によるサポートも導入している。
- 6) 今年度は、個人情報の収集方法について議論が起こった。

## 参考文献

- ・蝶慎一(2011),「「学生の視点」からみる学生支援」,『大学経営政策研究』第1号,東京大学大学院教育学研究科, 167-183頁
- ・中央教育審議会(2005),「我が国の高等教育の将来像(答申)」  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm))
- ・独立行政法人日本学生支援機構(2007),「大学における学生相談体制の充実方策について——「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」——」  
([http://www.jasso.go.jp/gakusei\\_shien/documents/jyujitsuhausaku.pdf](http://www.jasso.go.jp/gakusei_shien/documents/jyujitsuhausaku.pdf))
- ・独立行政法人日本学生支援機構(2008),『新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム事例集(平成19年度)』
- ・独立行政法人日本学生支援機構(2009),『新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム事例集(平成20年度)』
- ・独立行政法人日本学生支援機構(2011),『大学と学生 特集 学生支援』第91号
- ・本間啓二・金屋光彦・山本公子(2009),『改訂キャリアデザイン概論』,雇用問題研究会
- ・小泉潤二(2009),「人間科学部」,高杉英一・阿部武司・菅真城編『大阪大学の歴史』,大阪大学出版会, 180-190頁
- ・文部省高等教育局(2000),「大学における学生生活の充実方策について(報告)——学生の立場に立った大学づくりを目指して」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm))
- ・大阪大学学生支援ステーション(2011),『大阪大学学生支援ステーション年間活動報告書 2010年度』
- ・社団法人国立大学協会(2005),「大学におけるキャリア教育のあり方——キャリア教育科目を中心に——」(<http://www.janu.jp/active/txt6-2/ki0512.pdf>)
- ・杉村芳美(1997),『「良い仕事」の思想』,中公新書
- ・友枝敏雄他(2011),『年報人間科学・別冊 名誉教授への聞き書き』,大阪大学大学院人間科学研究科社会学・人間学・人類学研究室

## **The Activities of the Student Support Office: A Case at the School of Human Sciences, Osaka University**

Ken MARUTA

Student support has been gaining increasing attention as an essential educational activity in Japanese universities today. It was in the midst of this current that the Student Support Office at the School/ Graduate School of Human Sciences, Osaka University was set up in 2005. This article describes the activities of the Student Support Office since its establishment over five years ago. The main responsibilities of the Office are as follows: (1) “nandemo” (any issue) counseling services, (2) career support, (3) internship support, (4) high school related programs (receiving visitors, running open days, etc.), (5) liaisons with the alumni, and (6) scholarship matters. Detailed accounts are given of these activities except for (4), which does not directly concern enrolled students, and (6), which is mainly a matter of administrative procedures. This article will give the reader a fuller understanding of the role played by the Student Support Office and its important educational function.